

說苑



道路改良會首腦部と道路問題の推移

— 副會長内田嘉吉氏 —

清水生



過百の我國の道路

元來道路は

其の使命に於いて多少異なる

點あるも、鐵道と相俟つ

て陸上交通上の緊要機關であることは茲に多言を要しない、従つてこれが改良整備の如何は直ちに一國の産業上將來また軍事上其他國民生活の萬端に互つて多大なる影響を來たすのである、更ればこそ文化の向上せる諸國は道路については至大の肝心を拂つて、これが建設と改良等に努力をなすのである、彼の獨逸のナチス政策中に道路問題を真先に取り上げて以て、道路の整備改良に獨逸が力を致した

のを見て判明するのである、獨逸の道路政策が現在の獨逸決戰體制下に於て物資の輸送軍隊の動員其他有ゆる點に於て如何に役立つて居るかは這般獨逸交通當局から發表された獨逸の國內物資輸送狀況をみても首肯さるゝのである。然るにこの道路問題は敢へて獨逸のみならず、歐米諸國では夙に國家發展の一要素として道路を取扱ひ以て何れの國家も古くよりこれが改良整備に勉めつゝあつたが獨り我國の道路は從來から極めて不完全の状態に放置されて居て、實に人馬の交通にすら適せざるところ少なくなつたのである。この原因については筆者は前々から屢々論じたが封建時代の孤立制據の政策はこれを然らしめたのと、他

面に於ては道路に關する制度の確立がなかつたことも亦大なる原因であつたやりに思はれるのである、明治維新は幾多の勤王志士に依つて實現され我國の諸制度は其の面目を一新して茲に國家の基本法たる憲法は成立して、立憲君主國の制度は確立し、又府縣市町村制等自治制度及び其他の法制も漸次完備されたのであるが、獨り道路制度について

は僅かに明治九年の大政官達及び土木費負擔所屬區分に關する明治十一年の大政官達があるのみであつた。然るに國運の進歩發達は一面に於いて運輸交通機關の益々必要を痛感すると共に道路交通上における道路利用も益々要求さるゝに至つたのである。

副會長内田嘉吉氏

道路改良會は所謂富國強兵策上我國道路の改良整備の必要を痛感せられつゝある人々に依つて、去る大正八年三月一日を下して内務大臣官邸で發會式を舉行したのであるが、この會の目的使命たるや、既に屢々内外に向つてことある毎に發表して居るから茲では省略するが、要するに國家を益々發達せしむるには各方面に至大の關係を持つ道路の改良整備の必要を一般に尙一層認識徹底せしむるのが本會の目的である、而して會長に水野鍊太郎氏を副會長に内田嘉吉氏と前號に記した石黒五十二工學博士とを推舉したのである、爾來水野會長を始め内田石黒の兩副會長等は鋭意熱心に本會使命の達成に向つて多大の貢獻されたのであ

るが、現に水野氏は今尙努力せられつゝある。本題は内田氏についてであるから従つて氏のことを主として見ると。

嘗て本會の副會長であつた内田嘉吉氏は慶應二年十月の生れで明治二十四年東京帝國大學法學科を卒業して居る、間もなく司法官試補となつて司法界に入つたが後ち遞信省に轉じて遞信試補となり、更に同省參事官に任ぜられて大臣官房に勤務し故後藤新平伯の信任を享けて郵便局を経て三十年には管船局に入り、翌三十一年には歐米各國を視察して歸朝してゐる、同三十四年には累進して管船局長となつたが、丁度日露戰爭當時はその職にあつて戦時最も肝要なる海上船舶問題について其の敏腕を揮ひ、戦役後四十一年には再び歐米各國へ差遣されてゐる歸朝後、明治四十三年桂内閣の下に時の遞信大臣後藤伯の推擧に依つて臺灣總督府民政長官となり、大正四年十月に退官したのであつた、而して大正六年三月寺内内閣の時再び遞信省に入つて田健治郎遞相の下に次官となつたが、翌七年九月に於いて寺内内閣の總辭職原内閣

と交迭すると共に氏も亦退官したのであつた、而して同月過去の功績によつて貴族院議員に勅選せられたのである。

公益事業には理解が強い

次で大正十二年九月海軍の偉物山本權兵衛氏の第二次内閣が生れると氏は亦々後藤、田の兩先輩の推薦に依つて臺灣總督に親任せられたが、在職僅かに一ヶ年にして即ち同十三年九月加藤高明内閣の時に退官したのであるが、この短き在職の間に在ても氏は臺灣の水力電氣其他に相當功績を残してゐる。これが内田氏の官歴とも云ふべきものであるが、氏は其の略歴の示す如く多年遞信畑にあつたため、遞信行政には頗る精通して又相當の見識も持つて居たが、殊に電信電話等の通信關係の仕事にも研究を重ねて特に力を注いだのである、亦氏は電信協會の名譽會員顧問をして居たが、大正十四年十月には日本無線電信株式會社の設立と共に同社の社長となつて居る、既に有線時代にあらざるを看取して大いに無線電信

を鼓吹して同事業が今日の如く隆盛を招來せしめたる功績は實に偉大である、昭和七年には西班牙のマドリットにまた昭和十二年には米國のワシントンに於ける國際無線電信會議に出席のため二度まで海外に赴いてゐる、氏は頗る公共心に富み明治二十七年以來日本海員救濟會の

常議員又は理事に就任してゐるが、昭和二年には同會の理事長となつて海員の救濟に大いに勉むるところがあつたのみならず、又氏は交通事業にも少なからず理解を持ち道路改良會の創立に參與して、大正八年の春會の成立と同時に石黒博士と共に副會長に推薦されて爾來道路の宣傳講習會等に最も力を致し、殊に西は九州から北は北海道に至るまで態々出張して道路の改良整備の必要を普及するに盡瘁せられたのである。

斯様に内田氏は公益事業には進んで參與せられた人であつたから従つて、その關係するところは頗る廣範に涉つて居たが、昭和七年の舊臘に至つて突如として急性肺炎を病み惜しいかな、遂に起たず、翌八年一月三日午後六時に遂

に他界されたのである。風吹きすさむ九日に曹洞宗の本山である鶴見總持寺の畔に埋骨せられたのである、正三位勳一等に叙せられてゐる。

内田氏の道路に對する意見

前記のやうに内田氏は公共的事業には深く關心を持ちて居たが、殊に交通問題についてもその理解は甚だ強くたゞに本會にも關與されて至大なる功勞者の一人であるが、氏は嘗て道路問題に關して氏の意見を披瀝して。

全體道路の改良といふことは日本に於いては急務の一つであると思ふのである。我國は明治維新以來各般のことについては歐米先進國に其の長を取り短を補ふて、以て、諸般の事物着々と改良を施したのであつた、即ち國防關係に於いて或は教育關係等に於いて著しいのみならず、鐵道とか通信の關係に於ても其の他種々の方面にも相當見るべき進歩を遂げたのである。

とて、氏は維新以來の各文化施設に及んで。

然るに最も人間生活に將又國の富を成すに必要なると

この道路に就ては甚だ遅れた状態にある、外國人が我國に來て東京の道路を見て田を作つたら良からうといふ様な奇矯なる言葉さへ出る位である、全く東京の如き帝都に於てすら既にこの状態であるから他の都會若くは田舎道に至つては顧みられない状態である。

とて、我國の道路が非常に遅れてゐることを續々指摘して。

外國に行つて見ると何れも道路の良いことには頗る感服する次第である、米國の都會にしてもサンフランシスコの如きは僅かに人口六十萬ばかりで米國の都會としては小さいが、船が棧橋に横付になつて上陸すると、そのところにマーケット・ストリートと云ふ立派な道路があつて軌道が四線その中央にある、而して其の兩側に自動車其他の車が優に通行し得る車道がある。又その兩側には人道がある、全部そういふ様な廣い幅の道ではないが、主なる道路は以上のやうな有様で出來上つて居つて、自動車を走らせるには洵に心持がよい、其他シャートル・

バンクーバーに於ても太平洋岸の都會へ上陸して見ても道路が實に完全に出來てゐる有様である。カリフォルニア州は亞米利加の全國中でも田舎の道路が實に完全に出來てゐる、田舎道路に莫大な金を費やしてゐるから何れに行つても立派なものである、州全體が四通八達の状態に都會から離れたところでも何等苦痛を與へない、十哩二十哩離れたところに居住してゐても二三十分で往來が容易に出來て何等の不自由を感じないのである。

と、氏は當時米國の道路を實地視察した狀況を云つて。

道路法の制定と外國の道路

香港上海の道路の如きもよく改良されて居て日本の道路と比較しても餘程よい有様である、香港は僅かな面積であるが道路の完全なることは從來と變りなく、こゝを一週する二派の道路が造つてあり又散歩用或はドライブ用の道路さへある、又新嘉坡やロロンボでもヨーロッパ人が來て仕事をして居るが、土地の道路は何れも皆な日本の道路よりも遙かに良い状態である、元來植民すると

云ふことは必ず道路や港灣を先づ第一に築造し、交通機關の設備を先にするのが通例である、各國に於ても都市計畫を樹立して一定の計畫の下に道路改良せらるゝやうになつて來たが、日本でも都市計畫法が施行せられてから計畫樹立のもとに仕事して行くのであるが道路は獨り甚だ遅れた觀があつたが、幸に道路法の制定して又道路の改良に要する經費に支辨する爲に公債に關する法律も制定せられた譯けであるから、將來は大いに改善期待が出来ることと思ふのである。

と道路法の制定は道路の改良發達のために喜ぶべきことを云つて、然る後ち。

道路改良の事に付ては國民が道路改良の急務必要なことを知つて進んでこれに共鳴し以て實行するやうにならなければならぬ、尤も經費が必要であるからこれを躊躇する譯けであるが、然し現在の儘にて放任して置くは頗る不經濟である。道路改良會が嘗て調査したのに依ると東京市の道路改良費用は約三千五百萬圓を要する「大

正十年」而して東京市に入る所の物資荷物は一ケ年間に於いて約七萬噸であつた、茲に市の道路改良が急速に必要なとなつて來るのである、歐洲各國では戦後道路の改善に非常に努力をして居る「第一次世界大戦後」英京倫敦佛都巴里並に其の附近の田舎に於て道路の改善に努力して居ることは實に驚くべきものがある、これは戦時中五ケ年間は殆んど道路の改善に着手せなかつたから今後は大いに産業の奨勵をして國富を増進せしむるためには如何しても道路の改良を爲さなければならぬと云ふ關係から諸國は皆な道路改善に力を入れてゐるのである。

と氏は彼の第一次世界大戦後歐洲各國が直ちに競ふて道路の改善に着手した状態を續々云つたあとに次いで。

歐洲では自動車の使用といふことは非常に發達してゐるが、これは戦時中に於いて軍用自動車として製造したものを商業目的のために使はれるやうになつて來た關係からである、これは都會ばかりではなく田舎でも非常に自動車の増加して居る有様であるが、従つて道路を改良

する必要は痛切に感ぜられるのである、又戦争の結果輸送が非常に頻繁になつて來て輸送する機關も大きくなつて來た爲に從來の道路も更に改良を加へなければならぬといふ状態になつてゐる。

と歐洲の道路について詳細に述べて。

米國の道路費用について調査して見ると、千九百二十年の米國全體の道路經費豫算は二億五千萬弗即ち日本の五億萬圓に當るのである。「當時の爲替換算に依れば」一億弗は中央政府即ち合衆國政府から支出するのであつて、其他の一億五千萬弗は米國各州で支出するのである、かゝる莫大なる金額を使用するために道路交通が非常に圓滑に發達して、従つてその道路のために地方々々は開發されて結局亞米利加夫れ自身の富を増加するのである、幸に我國に於ても道路公債法によつて約六億二千萬圓の經費を使ふことになつて居るが、其の内二億八千萬圓餘は國庫支辨となるのである、米國では五億圓を使用すると云ふが、日本の方が多いやうに一寸と考へられ

るが、豈圖らんや、米國では一ヶ年間に五億圓を使用するのであつて、日本では三十ヶ年間に六億圓であるから全く比較にならないのである、而して從來日本の道路は放任されて居た點から見れば、六億圓といふ費用を道路改善等に使用すると定めたことは取も直さず洵に國家のため慶賀すべきである云々。

と内田氏は道路公債法の制定に依つて、兎に角我國の道路改善經費の確立したことを非常に喜んだのであつた。

内田氏について某氏の談

楮て内田氏は多年遞信行政の要衝に居つた關係上でもあらうが、電信通信事業については先覺者であり、亦斯界に多大の貢獻するところあつたが、生前氏と親交あつた某氏の語るところによると。

本邦で無線電信と云へば直ちに内田嘉吉氏を聯想する程氏はこの事業界の大恩人である、氏は官界引退後日本無線電信株式會社の要職にあつて、斯業の發展に努力したことは一般に認むるところであるが、又日露戦争當時

に於ては遞信省の管船局長として大いに手腕を發揮したが、其後次官を経て山本内閣の當時臺灣總督となり挂冠後は安全第一主義を標榜して人生の躡むべき道を唱へ或は大正七年五月に海底電信研究所のために自費で歐米に出張したりして大いに電信界に盡すところがあつた、當時氏は時代は既に有線時代ではないことを思ふて歸朝後は無線電信の鼓吹に勉めたのであつた。

と、内田氏と無線電信事業との關係を述べて。

一體内田氏は其他にも心を常に國家公共のことに馳せて居つたので、従つて公共的の幾多の施設等に寄與貢獻したことは多大である、即ち國家産業に必要な道路關係に於いても率先して道路改良會のために盡力し又海員救濟會の如きも、氏に依つて大いに會の使命達成を見たのであるが、昭和二年には米國ワシントンで開催された國際無線電信會議に帝國委員の顧問として參列したり、又昭和七年九月にはスペインのマドリットで開催された國際無線電信會議には日本無線電信會社の代表として參

列したが、兩會議共に國際電信條約及び同附屬規約の改正等に付いて帝國政府の委員と克く協調して、本邦の有利となるところを極力主張して以て、目的達成に努力したるなど、無線電信事業には大いに貢獻して居る、更に船舶の方面の事業に關しても寄與するところは甚大であつた。と内田氏を回顧して話されたが、曾て遞信次官であり又既往に於て政友會の幹事長であつた若宮貞夫氏は。

内田氏は遞信界では余の先輩であつて常にいろ／＼と指導を受けたものであるが頗る親切の人であつた、曾て電信協會の顧問名譽會員で時の遞信大臣であつた田健治郎男と、當時次官の氏は協會のためには随分種々盡力して呉れたものであつた、即ち當時協會の要求たる無線電信技術者の養成を電信協會に擔任せしむることに努力せられて省内の議を纏められて、その設備並に資金の募集講習所の設置の許可等は勿論政府在官諸氏を講師として派遣の承認に至るまで、即ち無線電信に關する教育機關開設の公私一切の援助をなされたことは協會當局者の

深く感謝して居るところであつた。
と云はれてゐる。

内田氏と無線會社と本會の關係

實際内田氏は我が通信界殊に電信事業については氏が畢生の力を致されたことは今尙斯界に於いてその功績を唱へられてゐるが、從來我國の對外に於ける電信系統は其の大部分は第三國の電信事業に依つて支配されて居たために、その通過電報に對しても誠に不利益なる取扱を受け易くして、從つてこれが政治上又は經濟上の見地からして實に遺憾の點が多々あつたのである、更れば第三國の羈絆を脱して以て對外通信上における帝國の自主的地位を確保せんがためには當時一大無線電信局の建設に依るを最上の策とするのであつたのである、然るに之が建設には巨額の費用を要する結果、財政上の關係からこれが支出は餘程困難が伴ふのであつた、茲に於て當時民營會社を設立して其の民間資本の力に依つて大無線局の建設をなすを以て策の得たるものとして、日本無線電信株式會社法を制定し、去る大正十

四年五月十一日にこの法案が施行されて、所謂日本無線電會社が當時法律に依る特殊會社として同年の十月二十日に創立されたのである、内田氏は該會社の創立委員として最初よりこれに關與しその創立後は同社の社長に推薦されたのであるが、この會社の目的は對外關係の無線電報の取扱をなすに無線電信の設備とこれに附屬する設備の一切をなして以て政府の用に供するのである、今やこの會社は國際電氣通信の仕事に關與して大東亞廣域に於ける通信事業に一大活躍をなして現代の非常時局に多大の貢獻をなしてゐる、氏は既に過去に於いて有線時代は過ぎ去つて無線時代たることに早くより着眼して無線通信の建設に最大の努力をなし今日あらしめたることは誠に氏の慧眼には敬服するところである、又内田氏は通信事業と共に交通機關は國家産業發達の見地からして、曩の歐洲大戰後の我が經濟事情と相關聯して益々肝要なることを看取し、殊に道路交通は其の交通器具が變革して自動車の發達に依つて道路交通は將來益々繁榮を招致すると共に生産品の増加は一層道路

改善の必要を痛感してゐることを達觀して道路改良會の創立及び專業にも寄與されたのであるが、當時道路改良會は調査部を設置して道路及び其の交通に關する法制、道路費に關する財政、道路の經濟上に於ける效果に關する事項、道路の線形、道路技術に關する事項について各科に分つて調査研究したのであつたが、氏は本會の副會長として調査部長を兼任して專業の進行を圖つて以て道路問題の各般に互つて裨益するところ少くなかつたのである。

氏は各地の講演會にも參加す

また他面に於ては道路專業の主管は道府縣これに當つて國はこれを助成すれば自然改良さるべきであるが、當時の道路の状態は改良の必要は益々切なるものがあるので、これを徒らに官廳のみの施設に一任して置くことは國家を思ふ所以にあらざるを以て官民一致道路改善の促進に努むるの要を認めたので、道路改良會は道路問題を闡明ならしむる趣旨の下に各地に講演會等を開いて道路政策、道路の改良と鐵道、道路と港灣、國防と道路、富源開發と道路、文

明の推移と道路改良、我國道路の現代的價値、道路建設と維持、道路改良と其の財源、自動車と街路、道路の保安、道路改良と愛護、交通上から觀察したる道路、歐米各國と道路の近情、日米兩國の道路改良の狀況、及び道路は一國文野の象徴、將來の交通機關と道路の改良、等々道路に關する諸問題を有ゆる角度から解説して國民の道路に對する理解の普及徹底に努力したのであるが、内田氏はこれ等各地の講演會にも事情の許す限り出張して大いに努むるところあつたのである、大正十四年の如きは水野會長と同伴松木、中川、堀切、比田、島、木原の各理事牧野、都築の兩幹事等と共に遙げる北海道各地にまで講演に勉めた位である、又道路法の施行によつて道路行政には一新紀元を劃して愈々道路改良の機運は向上して來たが、當時に於いては未だ適當なる技術者が少ないために從て道路工學の研究の必要を感じて、東京外六府縣並に六大都市に技術者の海外派遣を奨勵したのと共に文部當局及び東京京都九州の各帝國大學を始め官公私立専門學校等に道路工學振興に關する建議書

を提出したるが、尙道路改良會も亦道路職員講習會を開催して各々斯界の權威者に講師を囑託して以て道路工學の知識向上に努めたのである、而して講習者は各道府縣及び朝鮮、臺灣關東州等の各官廳に在職して道路事務又は技術の實際に携はつてゐる人々であつたがその講習修了者は數回を通じて約六百五十餘名を出した程であつた、然して道路改良の潛勢力を涵養したのであるが内田氏は亦副會長として終始この事業に關與されてゐるのみならず自ら講演に起ちて主として歐米の道路について講演されたのであつた。

内田氏は崇高の人格者

斯様に内田氏は道路問題……これに關聯して我が道路改良會に首腦部の一人として終始會命達成に努力するところのあつたのは畢竟氏の濃厚なる公的精神の然らしむるところであつたと思ふのであるが殊に道路の機能たるや、國防の充實は勿論、生産力の擴充、文化の發達に至大なる關係を持つて國運の振興上その基礎的施設たるに思ひを致したのであると觀察するのである。筆者は嘗て操弧界に居た際に内田氏には二三回遞信省で對面したことがある、この事

たるや今から既に三十年餘を經過してゐるので、從て氏の人物については明瞭に記憶してゐないが、只だこの拙文を書くと同時に憶ひ出すことは古語に所謂「人格者はその心は常に愛に溢れて居り、曇らざる慈愛に輝いてゐる」とあるが氏は確かに人格者であつた、故に當時若き新聞記者達に對しても遞信省のことについて何か聞かれば頗る丁寧親切に答へて寧ろ克く指導してくれたことを今尙ほ覺えてゐる、而も氏は學識と高邁なる識見を持つて且勤勉誠實であり、愛嬌を多分に持つて居て接する人に不快なる感を決して與へなかつたやうである、又他面に於いては謹直と溫厚篤實の人たるを思はしむるのであるが、その容貌風彩は紳士の典型を保つて人間として成業の重要な素質は殆んど全部と云ふ位に具備されてゐたといつて可なりである、氏の殘した仕事の中の一つである無線電信事業に關することだけ觀察して見ても偉大でその識見の高きを思はしむるのである。この國家の一人材もまた生者必滅の天地一原則には漏れずして惜くも佛語の所謂入寂されたのである而して氏の靈は總持寺畔に永劫の法悅を感得してゐるのである。